

本書第四巻「実相篇」下巻は、上巻(第二巻)で「物質無」が説かれ、中巻(第三巻)で「病氣本來無」が説かれたあとを受けて、いよいよ深遠な真理である「神と人間の実相」が縱横無尽に説き尽くされている。まことに「実相篇」の掉尾を飾るにふさわしい、神界の靈氣溢れる「神の書」である。

人は、この現象世界にあって、幾多の人生上のトラブル、悩み、煩悶等と遭遇し、それから何とか救われんと願い、宗門の扉を叩く。宗教に到る門は、今も昔も「貧、病、争」の三つに集約できる。しかば、いかにして、この三つの難問を解決し得るの

か。その端的な回答は、谷口雅春先生が神から受けた啓示である聖經「甘露の法雨」の中にある。

神があらわるれば乃ち

善となり、

義となり、

慈悲となり、

調和おのずから備わり、

一切の生物處を得て争うものなく、

相食むものなく、

病むものなく、

苦しむものなく、

乏しきものなし。

つまり、「神」をあらわしさえすれば、絶ては相整い、貧しさも病氣も争いもない、

完全円満なる大調和の世界がそこに現れる。それでは「神」とは何か？それを十全に説き明かしたもののが、本全集「生命の實相」なのである。

「哲学的には神とは『大生命』だ生命の大本源だ、と言つてしまえば何でもないようなものの、神とは必ずしもそんな抽象的なものではなく、活ける愛の神、生命の神、智慧の神、美の神であつて、それを見る眼さえあれば、人と人が相対するように、人格的にさえもあらわれ給うのであります」（本書一三一頁）と説かれているように、「神」とは、無限の智慧であり、無限の生命であり、無限の愛である。その神の無限の智慧が現れていないのを「貧」といい、その無限の生命が現れていないのを「病」とい、その無限の愛が現れていないのを「争」というのである。

それでは、「神」をあらわすにはどうしたらいいか？それは「顛倒妄想」即ち「あるものを無いと思い、無いものをあると思う心」を放ち去ることである。本書にはこう記されている。

「【大般若經】も「生長の家」の説くところも古今の真理は同じであります、感覺に映する一切の現象は空無である、現象が空無であるからその奥に清淨なるものがある、その奥に圓満なるものがある、その奥に自在なるものがある。この清淨、圓満、自在なるものこそ実在であるからこの真理を信解せよ、受持せよ、誦誦せよ、修習せよ、汝は自由自在の境地になれるであろう。どんな煩惱障のなかにいても、業障のなかにいても、報障のなかにいても、それに捉えられることはなくなるであろう。つまり、この真理を信じ、理解し、読み、実修したならば今までにどんな悪い惡業があり、どんな悪い因縁があり、どんな悪い障りを作つていよとも、それに煩わせられずに自由自在の境地にいることが出来るというのであります」（六六頁）

まさしく「真理は汝を自由ならしめん」である。この「生命の實相」に記されている「真理」が本物中の本物であるからこそ、昭和七年の初版皮表紙版発行以来、今日まで無数の奇蹟が起こり、無数の人々が救われてきたのである。本書にもそのことが次のように述べられている。

「果実を見てその樹の良否を知れ」という諺がありますが、今までのところに於て、

「生長の家」の本を信解し読誦し実修している方はこれだけの効果を得ていられるのであります。「生長の家」の本を私が書くのならばあまりに喋々その効果を語ることは気がひけるわけですが、これは私が書くのではない。(略)私は先生ではなく、先生とは天を指して靈界の神であるというほかはない。よく生長の家の本部の建物はどこだとき人がありますが、私が今坐っていることは生長の家本部ではなく「生長の家本部」は靈界にあるのです。(略)ともかく、私は皆さんと共に「生長の家」の一読者として、それを読み、習い、修養して皆さんと共に一歩一歩向上せんと努力している一求道者に過ぎないのであります。私だって道を外せば立ちどころにそれが具象化するのであります。かくの如く「生長の家」は單なる人間なる私が書くのではないからこそ尊い現代の經典たるを得る所以で、読んで病氣が治る程の真理が書けているのであります。聖書や御経も肉体のキリストや釈迦の言葉ではなく神の啓示が、キリストや釈迦の口から選り出たからこそ尊いのであります。「私がするのは私の業ではない、天の父のなしたまう業だ」と、キリストもこのことを知っていた。わたしも今同様の事を感じて

います」(六九〇七一页)

すべからく、ここに示されている言葉の凄みを思い知るべきである。一方において谷口雅春先生はあくまでも一求道者としての道を踏み外さない謙遜を失つてはおられない。しかし、その一方において、谷口雅春先生は、キリストや釈迦と同じく神からの啓示を受けているのだという自負をはつきりとここでお述べになつていらる。その自負がなければ、どうして聖書や仏典からかも自由自在に文章を引き得よう。

最後に、もう一点だけ述べておきたい。それは、宗派間の争いや一神教と多神教の宗教上の対立の問題である。それは単に宗教上の対立を越えて、国際紛争の根本原因ともなっている。世界平和はこの問題の解決なくしては実現しないともいえるのである。

それに対して、谷口雅春先生は、本書でも触れておられるが、はつきりと「万教場」の立場から、その対立・相克を乗り越えられている。つまり、簡単に言えば、神は一神にして、しかし、その現れ方は、時と處と人とに応じて違つてくるに過ぎない。「あらわれから見れば多神、もとから見れば一神」であり、それぞれの教えの神體に帰依され

ば、宗教対立、宗派争いは解決し得るのである。

ともあれ、この「生命の實相」こそは、今の時代が抱えるあらゆる問題への見事な回答の書なのである。そして、谷口雅春先生は、本書の締めくくりに次のように記されている。

「發じて明るい言葉を書いた書物より發する光は善靈を呼び、暗い言葉を書いた書物より發する光は惡靈を呼ぶのであります。」「法華經」や「甘露の法雨」が、それを受持し、書写し、説誦するだけでも功德があるというのは、その言葉の靈波のしからしむるところだと考えられるのであります」(二三四頁)

願わくば、この「生命の實相」を座右におき、善靈を呼び、すべての人が幸と勝利の人生を享受せられんことを。

平成二十四年九月一日